

沼野充義著

『徹夜の塊 3 世界文学論』

作品社, 2020 年

乗松亨平

「世界文学論」と題された本書だが、近年賑わいをみせる「世界文学」を直接のテーマとした文章は、全体のごく一部である。「世界文学というのは [...] 自分の外に広がっている世界の多様な文学に向き合う自分なりの読み方のことだ」(3 頁)。すなわち「世界文学」とは、「世界の多様な文学」自体のことではない。そうした所与のコーパスとして存在するのではなく、「世界の文学を広く読んでいく実践のための指針であり、その実践を支える倫理である」(34 頁) というのだ。この定義にしたがって、本書の多くの文章は、著者が「世界の多様な文学」をどのように読んできたかの記録となっている。著者の貪るような実践の記録をとおし、それを支える倫理たる「世界文学」が、私たちの前に立ち現れるだろう。

「世界文学」のこのような定義は人をいささか戸惑わせるが、安易な思いつきでは決してあるまい。「世界文学」は記述的に定義できる対象ではないし、そうすべきでもない。それが「世界で書かれた文学」のことなら、あらゆる文学が「世界文学」となってしまう定義にならない。もっとも、「世界」が地球全体・人類全体ではなく、その一部だけを指す限定的定義をもつことはありうる。「世界文学」が「世界的な文学」を意味する場合、その限定性ははるかに明らかで、あらためて「世界的」の意味を定義したうえで、どの作品が「世界的」でどの作品がそうでないか選別されることになる。「世界」「世界的」の定義がどのようなものであれ、そこには価値評価がともなう。「世界文学」を所与のコーパスとして定めることは、その評価の固定化を意味するだろう。だがそんなスタティックな規範性こそ、著者の考える「世界文学」が抗おうとするものだ。それゆえ「世界文学」は、記述的に定義されるより、倫理として実践をとおして示されねばならない。

こうした著者の考えは本書の構成にもみてとれる。本書第 I 部には、「世界(文学)とは何か?」という、ずばり「世界文学」の定義をめぐる硬質な概論が収められ、表題の問いの答えがたさが説かれている。「世界文学論」の口火を切るにふさわしいこの文章は、しかし第 I 部の 2 番目におかれ、冒頭を飾るのは洒脱な短いエッセイなのだ。「切手蒐集家の哀しみ、あるいは『早く家に帰っておいで、子供たち!』」と題されたその文章は、「世界文学」のコーパスの定めがたさを、決してコレクションを完成できない切手蒐集家の哀

しみになぞらえる。飽くなき蒐集に駆り立てられた経験をもつ者だけがこの哀しみを実感しうるように、「世界文学」の倫理も、貪るような読書の実践（の記録）をとおして初めて感得されるだろう。

だからこの倫理について記述的に論じるのは、書評として野暮であるという以上に、本書の企図への裏切りとなりかねないのだが、非才な評者には、せめていくぶんか自分の経験をまじえてそれを論じることしかできない。

「世界（文学）とは何か？」では、フランコ・モレッティとガヤトリ・スピヴァクの対立をとおして、「世界文学」の倫理をめぐる問題構成が明確にされている。『遠読』で知られるモレッティは、人はしよせん限られたいくつかの言語しか習得できない以上、原語による精読＝近読にこだわるのではなく、さまざまな言語で書かれた文学を臆さず翻訳で論じること（＝「遠読」）に、（比較）文学研究の未来を見出す。スピヴァクは『ある学問の死』で、そんなモレッティを「メトロポリスの多文化主義」の一端として批判し、旧植民地をはじめとする周縁の言語を習得する努力にこそ、（比較）文学研究の進むべき道があると主張した。著者はそれぞれの立場に理解を示したうえで、この対立のあいだの往復を自身の「世界文学」の倫理とする。

どの程度まで翻訳で済ませてもいいものか、どのくらい外国語を学ばなければならないのか。簡単な答はないが、できるだけたくさん外国語を学ぶ努力をし続けながら、同時にできるだけたくさんの文学を翻訳で読むことが必要である。両立しがたい、ほとんどダブルバインド的な課題だが、これが世界文学を読む者にとっての基本的な倫理ではないかと思う。（36頁）

この主張はごく常識的なようだが、言うは易く行うは難しの典型であって、それをみごとに実践してきたことに著者の凄味がある。とはいえ、盟友デイヴィッド・ダムロッシュの、世界文学は翻訳をとおして価値を増すという言葉がくりかえし引かれ、第Ⅰ部には「翻訳とアダプテーション」というセクションが設けられてもいるように、著者のとりわけ理論的な関心は、原語で読むことの意義の更新よりも、翻訳のもつ可能性の探求に向けられているように思える。

「日本文学の海外普及対策への提言」で、著者はグローバル化によって新たな「世界文学」が成立しつつあると述べる。それは「自国の文化のコンテクストを離れ、翻訳を通じて様々な異なる文化のコンテクストに受容され、そこで新たな生を始める——そういう現在進行中の現象としての世界文学である」（182頁）。翻訳が可能にするこうした「世界文学」には、グローバル化と同様の功罪両面があるだろう。翻訳を通じてテキストをそのコンテクストから離脱させ、異なるコンテクストのうちに移し替えることは、中心による周縁の消費や馴致、すなわちスピヴァクの批判した「メトロポリスの多文化主義」に陥りかね

ない。だがそれとは逆に、周縁の側が中心のコンテキストを組み替えるような翻訳もある。こうした両面があるからこそ、「世界文学」は倫理なのだともいえよう。

ここでの著者の翻訳論は、エドワード・サイードが「世界・テキスト・批評家」で批評について述べていたことを思い起こさせる。サイードによれば、あらゆるテキストはそれが流通した瞬間から、作者の統御できないコンテキストに巻き込まれた「世界内存在」と化する。だがそれは、テキストは「作者の意図」とは無関係で、それをどのように読もうと読者の自由だ、といったことではない。テキストは真空のなかで「自由」に読まれなどしない。批評家は過去のテキストに制約されつつ、同時に現在のコンテキストにも制約されて、テキストの新しい読み方を提示する（「新しい価値をつくりだす」）のだと、サイードはいう。一方、著者は「薄餅とクレープはどちらが美味しいか？」で、翻訳を三つのタイプに分ける。翻訳先言語のコンテキストに原語を適応させる第一のタイプ、原語への忠実さを優先する第二のタイプに対し、「第三の『媒介的』mediatoryなタイプは、翻訳者の母語と外国語の間を媒介し、そこにいわば第三の原語を作ろうとするものだ」（148頁）。モレッティ的立場とスピヴァク的立場のあいだの往復にも呼応したこの「媒介的」翻訳は、過去のテキストと現在のコンテキストの両方に制約されつつ新しい価値をつくりだす、サイードのいう批評によく似ている。そのような制約ゆえに、批評には責任がともなうのだとサイードは述べる。

芸術やエクリチュールが現在において意義を帯びる過程や現実的条件を、批評家はエクリチュールのなかで体現するのである。[...] もっとはっきり言うと、批評家はテキストのテキスト性によって支配され、追い出され、沈黙させられている声にある程度は責任があるということである。¹

著者のいう翻訳とサイードのいう批評との類似にもとづけば、原語によろうと翻訳によろうと、あらゆる読書や批評は一種の翻訳なのだといえる。テキストのコンテキストを移し替えるその行為は、決して自由気ままなものではなく、制約と責任をともなうのだ。人は望むと望まざると、読書に際してテキストを翻訳してしまう。そこにともなう制約と責任を自覚すること、自分の読みが追い出してしまう声の存在を自覚することを、サイードは批評と呼び、著者は倫理と呼んでいるのだともいえよう。

ただし両者のあいだには違いもある。人はおのれに課された制約をすべて自覚し、責任を完全に引き受けることはできない。責任を果たせないという以前に、自分がいかなる声

¹ エドワード・W・サイード（山形和美訳）『世界・テキスト・批評家』法政大学出版局、1995年、86頁。原文にしたがい訳を一部変更した。Edward W. Said, *The World, the Text, and the Critic* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1983), p. 53.

を追い出してしまったのか、責任を認識しきれないのである。サイドがあまり注意を向けないように思われるこの不完全さは切手蒐集家の哀しみに通じ、それこそが著者の倫理の基礎となっている。過去／原語のテキストに対しても、現在／翻訳先言語のコンテキストに対しても、人は完全には忠実たりえない。にもかかわらず、あるいはだからこそ、「できるだけたくさん外国語を学ぶ努力をし続けながら、同時にできるだけたくさんの文学を翻訳で読む」というところに、著者の倫理的選択がある。

くりかえしになるが、これは容易に実践できることではないし、また、あたりまえの選択でもない。最後にあえて個人的な話をする。評者はかつて、ロシア文学におけるコーカサス表象というテーマに取り組んだとき、著者とは異なる選択をした。コーカサスを描いたロシア文学を日本で論じるという二重の「翻訳」関係にあって、ロシアの作家たちが、まして日本の自分が、コーカサスという「原語」に対してどうあっても忠実たりえない、その不完全性が評者の関心の中心にはあった。それゆえ「原語」への忠実さはきっぱりと諦め、「翻訳先言語」のコンテキストに閉じこもるという選択を評者はした。翻訳に関する著者の分類にしたがえば、ブリヌィを割り切ってクレープと訳すような第一タイプということになるが、近年の古典新訳にしばしばみられるこうした方針への違和感を、著者はやんわりと表明している。

当時の書評で、著者は評者の選択に対し危惧と共感を同時に覚えるとしたうえで、次のようなアドバイスをくれた。

外国文学研究者に必要なのは、おそらくある種の「戦略的本質主義」と理論志向に支えられた越境的普遍主義の組み合わせなのであって、前者の中には専門とする地域にコミットし、その魅力を（戦略的に「本質的」なものと思ふふりをして）雄弁に語るという仕事も含まれていると私は思う。²

「戦略」の話としてオブラートに包んでくれてはいるが、著者はここで倫理について語っている。著者の倫理の基礎に、不完全たらざるをえないことへの哀しみがあるのに対し、評者の選択は諦めにもとづいていた。不可能だとわかっているのに諦めきれないというのが哀しみであろう。評者としては、著者のアドバイスを自分なりに胸に留めてきたつもりではあるが、著者の哀しみの狂おしさには及ぶべくもない。穏やかでユーモアを欠かさぬ著者の知性の核には、つねにそんな狂おしさがある。

² 沼野充義 『『遠い他者』に関わる形式を求めて』『表象』05, 2011年, 329頁。